

## 宗祖の折伏実践における涅槃經依用の一考察

——特に「立正安国論」「開目抄」について——

久 住 謙 是

「立正安国論」は、文応元年七月に、前の執権北条時頼へ上奏されたものである。正嘉元年八月の大地震が契機となって、宗祖ご一生の標榜となる「立正安国」の理想が展開され、国家諫暁のスタートが切られたのであって、実に折伏実践の旗印を掲げられた御書といえるであろう。

「開目抄」は、「立正安国論」によってスタートした折伏実践によって必然的に招来する迫害が、宗祖の法華經の行者の自覚を顕発され、折伏逆化の化導が、末法の法華經弘通の正意であることを宣示されるに至る。これ折伏は行儀・教相を離れ宗旨の根底を示された折伏論の闡明である。ここにおいて、涅槃經の折伏文引用の基本的姿勢、誦法破折は一貫しているが、両御書に依用される具体的依文には明らかかな推移が認められる。これは、その成立的因由と共に、法華經弘通の過程で行者意識の深まりによる変遷の顕示と看て取れるであろう。

知られるように、「立正安国論」は、破邪に紙数が尽され、破邪の強調によって顕正へ導かれ結論する。涅槃經は論旨にそって破邪の要法として第七番問答の答えに積極的な方法が提示されているところである。

上來論を進めて、災難の様態を挙げ、その原因に謗法の事実を明らかにし、国難を克服する方法、謗法対治の段に至って、一連の涅槃經が引かれる。

初めに、「一切大衆所問品」の

「(前略) 於<sub>ニ</sub>彼<sub>ノ</sub>正法<sub>ニ</sub>永無<sub>ク</sub>護惜建立之心<sub>ニ</sub>毀<sub>シ</sub>些<sub>シ</sub>輕賤<sub>シ</sub>言多<sub>ク</sub>禍咎<sub>ヲ</sub>。如<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>等<sub>ヲ</sub>亦<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>趣<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>一闍提道<sub>ニ</sub>。唯除<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>一闍提輩<sub>ニ</sub>施<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>余<sub>一</sub>者<sub>ニ</sub>一切讚歎<sub>スベシ</sub>。」

を出して、謗法者の禁施を、次の二文は、

「聖行品」

「我念<sub>ニ</sub>往昔<sub>ヲ</sub>於<sub>テ</sub>閻浮提<sub>ニ</sub>作<sub>レ</sub>大國王<sub>ト</sub>。名曰<sub>ニ</sub>仙予<sub>ト</sub>。愛<sub>ニ</sub>念<sub>シ</sub>敬<sub>シ</sub>重<sub>シ</sub>大乘經典<sub>ヲ</sub>其<sub>レ</sub>心純善無<sub>レ</sub>有<sub>ル</sub>竊<sub>ニ</sub>惡嫉恚<sub>ト</sub>。善男子我於<sub>ニ</sub>爾時<sub>ニ</sub>心重<sub>ニ</sub>大乘<sub>ト</sub>。聞<sub>ニ</sub>婆羅門<sub>ノ</sub>誹<sub>ニ</sub>謗<sub>ヲ</sub>方等<sub>ヲ</sub>聞<sub>キ</sub>已<sub>ニ</sub>即時斷<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>命根<sub>ト</sub>。(後略)」

「梵行品」

「如來昔為<sub>ニ</sub>國王<sub>ト</sub>行<sub>ニ</sub>菩薩道<sub>ヲ</sub>時斷<sub>ニ</sub>絕爾所<sub>ノ</sub>婆羅門<sub>ノ</sub>命<sub>ト</sub>」

によつて、謗法者の断命を、同じく

「梵行品」を示し、

「殺有<sub>ニ</sub>三<sub>ノ</sub>謂<sub>フ</sub>下<sub>ナリ</sub>中<sub>ナリ</sub>上<sub>ナリ</sub>。(中略) 若有<sub>ニ</sub>能<sub>ク</sub>殺<sub>ニ</sub>一<sub>ノ</sub>闍提<sub>者</sub>則<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>墮<sub>ニ</sub>此<sub>ノ</sub>三<sub>種</sub>殺<sub>中</sub>。善男子彼諸婆羅門等<sub>ハ</sub>一切皆<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>一闍提也。」

と、断命を論証し、あらゆる生類の殺害は、墮獄の報いを受けるが、謗法の一闍提は例外であると、強い調子で破折する。

続いて、謗法対治の手段を実行する人を選び出して、「壽命品」に

「今以無上正法付嘱諸王大臣宰相及四部衆。毀正法者大臣四部之衆應當苦治。」

と、付与され、最後の三文は、「金剛身品」を引証し、

「以下能護持正法因縁上故得成三就。是金剛身。善男子護持正法者不戒不修威儀一應持三刀劍弓箭鉾槩。」と示し、

「不戒不修威儀為護正法乃名大乘。」(中略) 雖持三刀杖我説是等一名曰持戒。」

とも説いて、さきの謗法の対治は国主に待つべきことを示される。終文は、「有徳王覺徳比丘」の本生譚を挙げ、武器を執つて正法の僧を謗法者の迫害から護り、自身が殉教した故事を四五六字にわたる長文を引用して、「有徳王」の護法の行と得果を語り、勧奨するところである。

以上の七番問答において、涅槃經の四品が謗法者の禁施と断命と護法者の刀杖執持の許容を明らかにされた。

次の八番問答に至つて、禁施と断命の取捨が行われ、断命を否定し、禁施に依る旨が決められ、初めの「一切大衆所問品」と「金剛身品」の「雖持三刀杖不戒不修威儀」の所説が肯定されてくるのである。

これらの涅槃經依用は、破邪の方法が、国主・為政者の威勢力をもつてする強調で、「立正安国論」の、国難の克服を為政者に上奏した動機と目的から来るものと思われる。

この涅槃經引用のパターンは、「立正安国論」撰述に先行する「守護国家論」・「災難興起由来」・「災難対治抄」などの御書に認められ、これら一具した所引は、立正に先立つ破邪の徹底で「立正安国論」撰述を中心とする折伏の傾向を示すものである。

すなわち、「国王付嘱」にみられる法華經による能統一が、社会的規制をまってもたらそうとされた第一の諫暁の意

図が窮われるのである。これは、また、天台大師の法華・涅槃の撰折所判において、止観第十にいう「刀杖斬首」、文句第八にいう「親付国王」をもつて涅槃折伏と規定した約行門の實際的活現としても注目されるところである。

しかし、宗祖の撰折論は、ここに止るものではなく、法華自成の本化撰折を規定し、能弘の師は一向折伏の判を示されるのである。

「開目抄」は、それを明示された御書といえるであろう。

「立正安国論」によって、理想が標榜されると共に、謗法に対する折伏の必然として弘教は法難を惹起させる。折伏逆化の師子吼が、たび重なる流罪・死罪をもたらし、「勅持品」の「かくあるべし」という予言と、「不輕品」の「かくのごとし」という行相の折伏を体得された宗祖は、流謫の地佐渡において、本化上行のご自覚を吐露されると共に法難の原因たる折伏弘通こそ、末法の化導の正しき方軌なることを、門下に初めて闡明されたのである。

「開目抄」における涅槃経依用は、「立正安国論」の威勢力を以てする法の付嘱と謗法対治の軌跡は認められず、次のような傾向の所引が顕著になってくる。

能弘の師の師子吼の破折がより強調され、

「寿命品」の

「見<sup>チ</sup>壞<sup>ル</sup>法者<sup>ヲ</sup>置<sup>テ</sup>不<sup>ニ</sup>呵<sup>責</sup>驅<sup>遣</sup>擧<sup>シ</sup>処<sup>ニ</sup>當<sup>シ</sup>レ知<sup>ル</sup>是人<sup>ノ</sup>弘<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>怨<sup>ナリ</sup>。若能<sup>ク</sup>驅<sup>遣</sup>呵<sup>責</sup>擧<sup>シ</sup>処<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>我<sup>ノ</sup>弟子<sup>ナリ</sup>。」

や、同趣意の経疏である。

「壞<sup>ス</sup>乱<sup>ル</sup>弘<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>弘<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>怨<sup>ナリ</sup>。無<sup>ク</sup>慈<sup>ク</sup>詐<sup>シ</sup>親<sup>ヲ</sup>是<sup>レ</sup>彼<sup>ノ</sup>怨<sup>ノ</sup>能<sup>ク</sup>糾<sup>ス</sup>治<sup>ス</sup>。是<sup>レ</sup>護<sup>ル</sup>法<sup>ノ</sup>声<sup>ノ</sup>聞<sup>ク</sup>真<sup>ニ</sup>我<sup>ノ</sup>弟子<sup>ナリ</sup>。」

が引かれる。謗法者を詮顯する引用として、

「如来性品」にいう

「似<sup>スガタ</sup>像<sup>ハニ</sup>持<sup>ニ</sup>律<sup>ニ</sup>少<sup>ニ</sup>説<sup>ニ</sup>誦<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>貪<sup>ニ</sup>嗜<sup>ニ</sup>飲<sup>ニ</sup>食<sup>ニ</sup>長<sup>ニ</sup>養<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>」(中略) 雖<sup>モ</sup>服<sup>ニ</sup>袈<sup>ニ</sup>裟<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>猶<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>獵<sup>ニ</sup>師<sup>ニ</sup>細<sup>ニ</sup>視<sup>ニ</sup>徐<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>猫<sup>ニ</sup>伺<sup>ニ</sup>鼠<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>唱<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>我<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>羅<sup>ニ</sup>漢<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>(中略) 外<sup>ニ</sup>現<sup>ニ</sup>賢<sup>ニ</sup>善<sup>ニ</sup>内<sup>ニ</sup>懷<sup>ニ</sup>貪<sup>ニ</sup>嫉<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>瘡<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>婆<sup>ニ</sup>羅<sup>ニ</sup>門<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>実<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>沙<sup>ニ</sup>門<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>現<sup>ニ</sup>沙<sup>ニ</sup>門<sup>ニ</sup>像<sup>ニ</sup>邪<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>熾<sup>ニ</sup>盛<sup>ニ</sup>誹<sup>ニ</sup>謗<sup>ニ</sup>正<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>」  
と、正法を否定する根源的な悪、謗法は外道などの俗衆の悪罵迫害よりも、実は仏道の崇敬を集める権門の人師の中にこそあつて、

「泥洹經」六卷の「四依品」をもつて、さらに的証して、

「不<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>究<sup>ニ</sup>竟<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>彼<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>闍<sup>ニ</sup>提<sup>ニ</sup>輩<sup>ニ</sup>究<sup>ニ</sup>竟<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>業<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>」

と、三類の敵人の内、第三の僭聖増上慢の人師の謗法こそ一闍提とよばれるべき底知れぬ極悪は容易に知ることができないことを示し、「一分の仏眼を得るもの此れを知るべし。」と、仰せられているところである。

さらに、「金剛身品」の

「若<sup>レ</sup>殺<sup>ニ</sup>若<sup>ニ</sup>害<sup>ニ</sup>」

の依文や、

「壽命品」の「譬<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>貪<sup>ニ</sup>女<sup>ニ</sup>」の引文、

「(前略) 欲<sup>レ</sup>護<sup>ニ</sup>正<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>彼<sup>ニ</sup>貪<sup>ニ</sup>女<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>恒<sup>ニ</sup>河<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>愛<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>子<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>捨<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>。善<sup>ニ</sup>男子<sup>ニ</sup>護<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>菩<sup>ニ</sup>薩<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>応<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>寧<sup>ニ</sup>捨<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>。如<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>雖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>求<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>脫<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>脫<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>彼<sup>ニ</sup>貪<sup>ニ</sup>女<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>求<sup>ニ</sup>梵<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>梵<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>。」

のように、正法の難信・弘教の難持を示して護法の覚悟を門弟へ勧められている。

このように、「開目抄」は、法華經の折伏文と共に、折伏逆化の対治に、謗法の詮頭に、正法の難信・難持に多くの涅槃經が依用經証されていることが知られる。

特に注目されるのは、「泥洹經」の「四依品」、

「過去曾作<sup>ニ</sup>無量<sup>ノ</sup>諸罪種々<sup>ヲ</sup>惡業<sup>ニ</sup>。」（中略）現世輕受<sup>ニ</sup>斯由<sup>ニ</sup>護法<sup>ノ</sup>功德力<sup>ニ</sup>故。」

の文を引いて、宗祖は感慨をこめて、

「此の經文日蓮が身に宛も符契のごとし、狐疑氷とけぬ。」

と、述べられ、値難が本化上行のご自覚と表裏して、ご自身の折伏、過去謗法の宿罪の反省を深められた本拠とされていることである。然して、自行化他にわたる折伏が、全現され、折伏逆化の忍難弘教は、化他即自行の懺悔行へと昇華されたのである。

ここにおいて、「開目抄」は、天台三大部及び積論書を出して撰折の原論を説示し、末法の撰折を決するに、

「無智惡人の国土に充滿の時は撰受を前とす。安樂行品のごとし。邪智謗法の者多時は折伏を前とす。常不輕品のごとし。（中略）末法に撰受折伏あるべし。所謂惡国・破法の兩國あるべきゆえなり。日本国当世は惡国か破法の国かとしるべし。」

と、定判されるに至るのである。「立正安国論」の専一対他破折の折伏行が、化他即自行と止揚され、「立正安国論」の折伏の開展、スタートが、末法の化導方軌の正意と闡明され、所破の対象の糾明・謗法の詮頭が徹底深化され、予言された人、予言を実行した人の本化上行のご自覚に至らしめたといえる。

この意味で、「立正安国論」の折伏実践のスタートは、「開目抄」において結実したといえるであろう。

然らば、両ご書に引用された涅槃經依用は、どのように位置づけられるであろうか。

「観心本尊抄に」、「十方三世諸仏、微塵経々皆寿命序分也。」と、本法三段が闡明される寿命品所顯の要法五字は末法に本化の宗祖によって弘通されるとき、「命勸」「付嘱」の責を担う流通分の重視を認めないわけにはゆかない。正しく折伏逆化の実践は、本門三段の流通分の資格である不輕菩薩の行相であり、迹門三段の流通分である勸持品二十行偈文の予言の体得である。

「法華折伏破權門理」の、いわゆる教門の折伏、要法に内在するところの破邪顯正が、本化の師、宗祖によって具現される。教門のそれは行門の折伏へと移行されるところに、理論から實際へ、理から事への展開であるならば、宗祖の闡示された正宗分の活現は流通分の弘通実践といえるのであろう。

涅槃經は、この視点から言えば、「立正安國論」の謗法対治を決せられ、「開目抄」において、ご自身の過去の誹謗正法の反省を値難に求められた自行の折伏の本拠となったのであり、宗祖が常踏に記される「法華經の流通分」たる一代三段判の資格において、特に行門の折伏に特色づけられる具体的・積極的一闡提救治と末法超克思想が、宗祖の折伏逆化の化導に援証依用されていたと考えられるのである。

以上

(紙数の都合により註は略させて載せます)